様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ０３４９６

研究課題名（和文）初期印刷文化における「書物のあるべき姿」の変容の総合的な解明

研究課題名（英文）A comprehensive study of changes to the 'ideal' appearance of the book in early print culture

研究代表者
安形　麻理（Agata, Mari）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：７０４３３７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、西洋の初期印刷文化において、人々が抱く「書物のあるべき姿」がどのように変容したかを明らかにすることである。1545年までに印刷された聖書を対象に、形態的特徴に関する詳細な調査を行った。その結果、初期印刷本の形態的特徴の変化と、その背後にある印刷業者による技術と工夫の諸相を明らかにすることができた。印刷業者が、経済的効率性も考慮しつつ、読者が聖書の「見た目」に対して抱く期待を満たそうとしたこと、また印刷業者によってはそれを積極的にアピールすべき点とし強調していたことが明らかになった。ただし、印刷地や印刷業者、言語とでは異なる傾向が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
写本から印刷本への移行にともなうヨーロッパにおける書物の変化は、近年さかんに研究されている領域である。しかし、複製技術の変化が書物の見た目の変化に直結するわけではない。本研究では、1545年まで、つまり最初期の90年間に印刷された聖書を対象に詳細な調査を行い、書誌学、書物史、文学、美術史などの複数のアプローチから、変化の諸相を明らかにした。そこから、初期印刷文化における印刷業者と読者の双方が抱く「書物のあるべき姿」に対する期待とその変化の解明に取り組んだ。これは、現代社会の基盤である印刷文化をより深く理解することにもつながる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify changing expectations of "how a book should look like" in early European print culture. The appearance and physical characteristics of the Bibles printed before 1545 were examined in detail. The results showed the various changes in their physical characteristics and the different aspects of the printer's skill and ingenuity behind them. It became clear that printers were trying to meet readers' expectations for the "look" of the Bible, while at the same time taking economic efficiency into account, and that some printers emphasized this as a point of attraction. However, there were some differences between places of printing, printers, and languages.

研究分野：書誌学

キーワード：書誌学　インキュナブラ　装飾　印刷文化　書物史　タイトルページ　活字　挿絵

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

西洋の活版印刷術は、15 世紀半ばにドイツのマインツ市でヨハン・グーテンベルクによって発明され、印刷革命と呼ばれるほど大きな社会的影響をもたらした。それにより成立した印刷文化は、現代社会の基盤となっている。そうした問題意識から、近年、写本から印刷本への移行にともなう書物の変化が注目を集めている。これまでも全般的なサイズの小型化や生産量の増加といった大きな傾向は理解されていたものの、形態的変化の詳細には未解明の部分も多かった。それは、初期印刷本の現存本は世界中の図書館に分散しているため、従来は特定の所蔵館のコレクションを対象とするサンプル調査か、典型例の事例調査に限定されざるを得なかったためである。

近年、データベースの整備やデジタル画像の公開の増加により、こうした制約は解消されつつある。その結果、標題紙（タイトルページ）の登場と普及やページ付けなどのさまざまな変化を経て、16 世紀半ばには書物が現在まで引き継がれるメディアとしての特徴の多くを備えるに至ったことが明らかになりつつある。また、個別の現存本の装丁や書き込み、来歴の調査から、読者による受容のあり方を探る事例研究も活発に行われている。

しかし、印刷本の形態的な特徴の変遷に関する書物史の観点からの解明には残された課題も多い。初期印刷本の形態は、写本の伝統を継承しつつも、多くの試行錯誤を通じて変化していった。書物の形態の変化は、印刷技術の発展の自動的な結果ではなく、印刷業者が心に抱く「書物のあるべき姿」に照らして行う意識的・無意識的な決断によって生じるもので、読者の期待や反応との相互作用の結果を反映していると考えられる。そこで、初期印刷文化を理解するには、形態的特徴の変遷の背後にある「書物のあるべき姿」を解明することが不可欠だと考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、中世写本文化を基盤に発展した西洋の初期印刷文化において、人々が抱く「書物のあるべき姿」がどのように変容し、書物文化の新たな規範となっていったのかを明らかにすることである。ここでいうあるべき姿とは、抽象的な理想形ではなく、印刷業者と読者の双方がもつ前提と期待を実際の物理的な物体としての書物に具現化する際の参照枠を指す。

具体的には西洋書物文化の規範を高度に具現化していると考えられる聖書を研究対象とし、15 世紀半ばから 16 世紀半ばに印刷されたラテン語および俗語のすべての版を調査対象とする。書誌学、書物史、デジタル・ヒューマニティーズ、文学、美術史などの複数のアプローチから、量的および質的に変化の諸相を明らかにし、具体的な事例に基づく複層的な分析を行う。このため本文「テクスト」、レイアウトや挿絵などの「パラテクスト」、社会的・文化的背景である「コンテクスト」の観点から、以下の 3 つの課題を設定した。

① 初期印刷文化における聖書の形態的特徴の変遷の分析（テクスト・パラテクスト）
② 聖書に対する同時代の印刷業者の認識と読者の期待の分析（コンテクスト）
③ 「書物のあるべき姿」の変容の総合的な解明

３．研究の方法

研究対象は、西洋最初の本格的な印刷本であるウルガータ聖書、いわゆるグーテンベルク 42 行聖書（1455 年）の出版から、典礼のあり方を定め新たなウルガータ聖書の刊行を決定したトリエント公会議の開始（1545 年）までの 90 年間に刊行された聖書とした。これにより、「あるべき姿」の規範が揺らぎ、さまざまな試行錯誤が行われていた時期を対象にできる。言語や注釈の有無は問わず、一部の書から構成されるものも含めたが、コンコーダンス、注釈のみ、索引のみの場合は除外した。15 世紀についてはインキュナブラの総合目録データベース Incunabula Short Title Catalogue（ISTC）、16 世紀については Universal Short Title Catalogue（USTC）から抽出し、重複を除くと、377 件となった。

調査対象について各種の書誌や所蔵目録から基礎的なデータを把握した。次に、デジタル画像が公開されている場合や、可能な場合には複写申請によりデジタル画像を入手し、詳細な調査を行った。画像が入手できない場合は所蔵館を訪問し原資料を調査し、可能な場合はデジタルカメラで特徴的な部分を撮影した。ただし、最終的に画像または原資料による詳細な調査ができなかった版もある。

主な調査項目は、タイトルページおよびコロフォンの有無、有る場合は語数や記述内容、序文の有無や記述内容、二色印刷、使用活字の種類と形態的特徴、ページレイアウト、章番号、欄外標題、フォリオ番号、ツール（注釈やヘブライ人名辞典、索引、コンコーダンスなど）の有無、書や章の冒頭イニシャルの扱い、木版画の利用、手描きの装飾、印刷業者および読者による修正、書き込みである。最後に、調査結果を、言語、出版年、出版地、印刷業者などの観点から分析した。

４．研究成果

タイトルページは 1490 年代以降に標準的になり、語数も急増する。これは先行研究で明らかになっているインキュナブラ全体の傾向と一致するが、増加時期はやや遅い。タイトルページの語数は言語（ラテン語か俗語か）、印刷地、印刷業者により違いが見られた。印刷者、印刷年（月日）、印刷地という近代的要素の提示は 1520 年代後半から増加する。最初期の聖書は本文だけであったが、次第に便利なツールを備えたものが印刷されるようになり、さらにそのことをタイトルページやコロフォンで積極的に示すことが増えた。そうしたツールがない場合に、読者が目次などを書きこんでいる例も見られた。タイトルページまたはコロフォンで、本文の正しさを強調する版や、1500 年代から 1520 年代にかけてはフォリオ番号入りであることを強調する示す版も増えていた。ただし、フォリオ番号は必ずしも参照箇所として十分に活用されているわけではなかった。

二色（赤字）印刷には、より高い技術が要求され、印刷業者にとっては時間と費用がかかる。15 世紀には赤字はタイトルページよりもコロフォンが多く使われていた。16 世紀になるとタイトルページにも使うことが増えたが、そのことは文言として強調されたわけではない。

グーテンベルク聖書の活字の形態的分析も行った。最初期の活字については、繰り返し使

うことができる母型から大量の同一の活字が鋳造されたという定説の再考をうながす先行研究がある。本研究において、機械学習を用いた活字の識別を行い、形態の分析を行った結果、複数の母型が使われていたと考えるのが妥当であることが示された。

聖書の装飾・挿絵について、主にグーテンベルク聖書と、その後継の出版者と言える、ペーター・シェーファー出版のラテン語の聖書を中心に調査を行った。まず特筆すべきは、これらの印刷業者は、聖書に含まれる膨大な数の書や章の冒頭を彩飾イニシャルで視覚的に示すという中世以来の伝統を、印刷術導入後もそのまま引き継いだため、保守的な外観を有していたという点である。一方で、大量に印刷された聖書の膨大な数のイニシャルを効率的、かつ高品質で装飾するための工夫も多く観察された。例えば、一部で色印刷を導入したり、複数の装飾画家や写字生を雇って均質な装飾イニシャルを描かせたり、一部の現存本については、別の都市の業者が装飾を手配し、販売したとも考えられる。本調査からは、長い写本の伝統の中で確立した聖書の「見た目」を損なうことなく、効率的に装飾を行うために印刷業者シェーファーが持てる限りの技術と工夫を導入した様子が明らかとなった。

俗語の初期印刷本については、聖書に限定せず、慶應義塾大学図書館が所蔵する 15〜16 世紀のイギリス刊本の書誌学的な調査を行った。同図書館を調査対象としたのは、国内有数のコレクションがあり、原資料調査が可能であったためである。タイトルページ、コロフォンの転写と校合式の記述に加えて、製本や書き入れ、来歴等の情報を調べることで、俗語聖書に代表されるイギリス初期刊本の形態面における変化の一端を示した。

こうした調査結果からは、初期印刷本の形態的特徴の変化と、その背後にある印刷業者による技術と工夫の諸相を明らかにすることができた。印刷業者が、経済的効率性も考慮しつつ、読者が聖書の「見た目」に対して抱く期待を満たそうとしたこと、また印刷業者によってはそれを積極的にアピールすべき点とし強調していたことが明らかになった。ただしラテン語と俗語とでは傾向が異なり、これは想定読者層や用途の違いを反映していると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Satoko Tokunaga, Ed Potten, Yuki Sugiyama, Yuta Nishikawa	４．巻 76
２．論文標題 A Preliminary Descriptive Catalogue of Sixteenth-Century English Books at Keio University Library	５．発行年 2022年
３．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学	６．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Agata Mari、Agata Teru	４．巻 115
２．論文標題 Statistical Analysis of the Gutenberg 42-line Bible Types: Special Focus on Letters with a Suspension Stroke	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Papers of the Bibliographical Society of America	６．最初と最後の頁 167-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1086/713981	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ikeda, Mayumi	４．巻 25
２．論文標題 Labour-Saving or Labour-Demanding? Replicating the Illumination of the 1459 Durandus	５．発行年 2024年
３．雑誌名 The Library	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 徳永聡子、杉山ゆき、西川雄太	４．巻 9-10
２．論文標題 イギリス初期刊本を記述する：西洋貴重書オンラインカタログ作成のための基礎調査	５．発行年 2022年
３．雑誌名 慶應義塾大学DMC紀要	６．最初と最後の頁 83-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安形麻理	4．巻 59
2．論文標題 インキュナブラ研究における活字の分類	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代の図書館	6．最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安形麻理	4．巻 14
2．論文標題 科学は贋作を判定できるか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 書物學	6．最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 安形麻理/Mari Agata
2．発表標題 西洋の初期印刷聖書における標題紙とコロフォンの変遷：記載・強調される要素への着目/ Changes in Title-Page of Early Printed Bibles in the West: A Focus on the Elements Described and Emphasized
3．学会等名 書物の背後にあるもの /Behind the Book（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 安形麻理
2．発表標題 初期印刷聖書におけるタイトルページの特徴
3．学会等名 2021年度日本図書館情報学会春季研究集会
4．発表年 2021年

１．発表者名 Mari Agata
２．発表標題 Analysis of the Gutenberg 42-line Bible types aided by type-image recognition
３．学会等名 Digital Humanities 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ikeda, Mayumi
２．発表標題 Printing or not Printing Colour in the Early Mainz Presses
３．学会等名 Printing Colour and Colouring Prints in Fifteenth- and Sixteenth-Century Europe: Comparative Perspectives,Institute of Art History, University of Warsaw（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 安形麻理
２．発表標題 西洋の初期印刷文化における聖書のパラテクスト面の特徴とその変遷
３．学会等名 日本図書館情報学会2019年度研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 池田真弓
２．発表標題 インキュナブラの装飾と挿絵
３．学会等名 第30回慶應義塾図書館貴重書展示会
４．発表年 2018年

１．発表者名 安形麻理
２．発表標題 活版印刷術の黎明：デジタル時代のグーテンベルク聖書研究から考える
３．学会等名 U-PARL アジアンライブラリーカフェno．4
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 池田真弓	４．発行年 2022年
２．出版社 知泉書館	５．総ページ数 285
３．書名 「世界に散らばる装飾写本:マンスフェルト祈祷書を辿って」『旅するナラティヴ：西洋中世をめぐる移動の諸相』（大沼由布、徳永聡子編）	

１．著者名 安形麻理（編著）	４．発行年 2023年
２．出版社 慶應義塾大学文学部	５．総ページ数 119
３．書名 「書物への書き込みから読み取る読者の記憶」『書物と社会の記憶：2022年度極東証券寄附講座報告書』	

１．著者名 Mari Agata	４．発行年 2023年
２．出版社 Keio Museum Commons	５．総ページ数 252
３．書名 "Approaches to the history of book through digital humanities" in Book scape: cultural landscape of books and the web of associations / 「書物史へのデジタル・ヒューマニティーズによるアプローチ」『本景：書物文化がつくりだす連想の風景』	

1．著者名 安形麻理，今野 真二，高橋智，木村麻衣子，瀧本佳容子，新藤 透，大沼由布，川村文重，池谷のぞみ，緑川信之	4．発行年 2020年
2．出版社 慶應義塾大学文学部	5．総ページ数 117
3．書名 書物と知の組織化	

1．著者名 安形麻理編著、慶應義塾図書館編	4．発行年 2018年
2．出版社 慶應義塾図書館	5．総ページ数 107
3．書名 インキュナブラの時代 ： 慶應義塾の西洋初期印刷本コレクションとその広がり ： 第30回慶應義塾図書館貴重書展示会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	徳永　聡子 (Tokunaga Satoko) (60453536)	慶應義塾大学・文学部（日吉）・教授 (32612)	
研究分担者	池田　真弓 (Ikeda Mayumi) (70725738)	慶應義塾大学・理工学部（日吉）・准教授 (32612)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 書物の背後にあるもの：初期近代における書物のデザイン、生産、利用/Behind the book: designing, producing, and using books in the early modern period	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 2023 Keio-BL 書物史国際ワークショップ「貴重書の旅の東西」	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	ヨーク大学			